

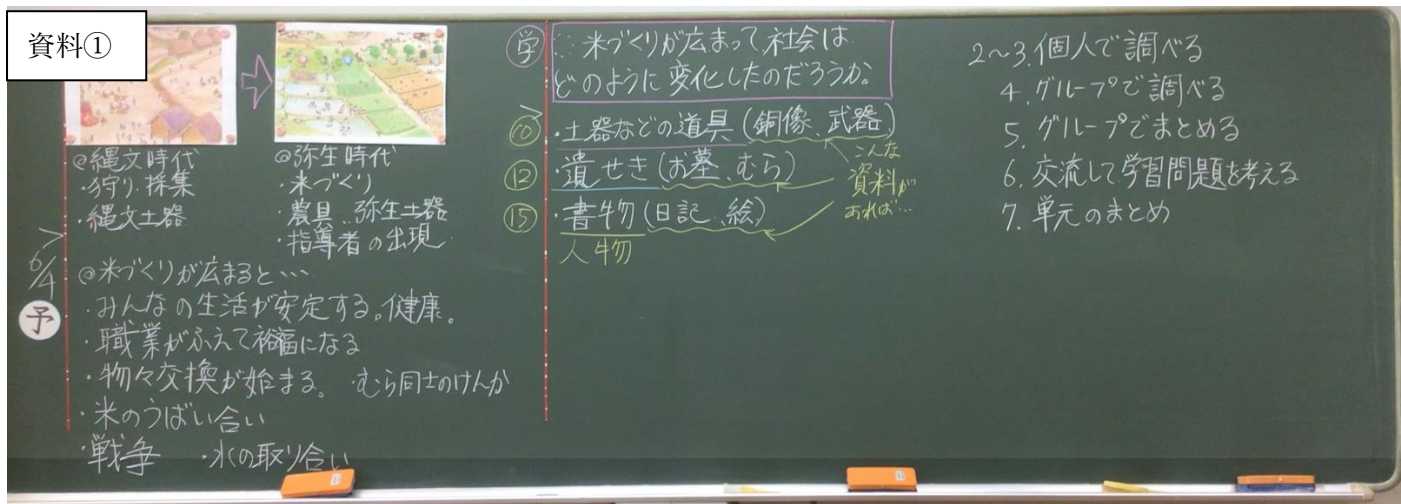
7 事後分析

研究内容1 児童の思考に沿った単元デザイン

(1) 児童生徒が主体的に学ぶための課題設定と見通し

○本単元の課題は、児童の予想をもとに設定することで、学びを進める方向性を明確にした。また、見通しを立てる際には、学習問題を解決するために必要だと思う資料について考えることで、調べるべき資料について児童自身が見通しをもてるようにした。(資料①) これらの手立てによって、調べ学習では、自らの予想や単元の課題を解決するための探究活動に主体的に取り組む姿が見られた。

▲本単元では、米づくりが広まってからの段階を出発点として探究活動を設定した。児童がこの出発点を意識し続けて学習を進めることで、時代の変化についての理解がより深まると考えられる。そのため、課題設定においては、児童が単元を通して意欲を保ち続けられるように、より理解しやすく自分事として捉えやすい文言にすることが必要である。



(2) 児童生徒が資質・能力を身に付けるための自己選択の機会と学び合い

○本単元では、児童が立てた見通しに応じて調べる視点を「遺跡」「道具」「人物」の3つに集約し、自己選択の機会を設けた。また、調べる際には、教科書や資料集の他に、学習内容に関連したリンクをパドレットに整理したことで、児童は予想を確かめたり、興味関心を広げたりしながら効果的に情報を収集する様子が見られた。(資料②)

○本単元では、第5時で同じ視点を選択した児童が集まり、テーマについてさらに調べる時間を設定した。このことによって調べ学習における個人差を学び合いによって補完する姿や新たな疑問をもつ姿が見られた。(資料③)

▲本単元では、3つの視点に複線化し、視点ごとに分かれて探究する時間を3時間設定した。これにより、選択した視点についての学びの深まりは見られたが、選択しなかった視点についての学びの深まりは不十分であった。また、複線化を図るタイミングや時間配分についても吟味が必要である。

▲本時では、視点ごとの学習の成果を交流し、つなぎ合わせることで、時代の変化を掴めるように学び合いを設定したが、調べたことを交流するにとどまる児童が見られた。このことから、複線化によって得た学びを共有する時間を十分に確保することや、児童自身が学び合いの目的意識を明確にもって活動することが重要だと考えられる。



(3) 児童生徒が学びの価値を感じる振り返り

○本単元では、学習内容や学習形態が変わる場面である第1時、第3時、第7時に振り返りを設定した。第1時では、振り返りをすることで、歴史学習を進める上での見通しについて共通理解を図ることができた。第3時は、個人の調べ学習についての振り返り(資料④)、第7時では単元の振り返り(資料⑤)というように振り返りのねらいを明確にしたことで、次の学習内容についての意欲の向上が見られた。このように、学習内容や形態が変わるタイミングで意図的に振り返ることは、学習意欲の向上や、児童が学びのつながりを意識することに効果的に働くと考えられる。

資料④

①わかった/わからなかったこと、できた/できなかったことを書きましょう。わかったこと、できたことは大昔から、外国から、交流があったり、政府に反発する人がいたり、資料から、詳しく調べられて、うまくまとめられたと思います。わからなかったこと、できなかったことは、ワカタケルや、ヤマトタケルについて詳しく調べられなかったところです。

資料⑤

②学習を通して新しく気づいたこと、よりよくわかることができたことを書きましょう。
理由 友達の調べたことを聞いて、まとめではより詳しくまとめることができた。

④上の①②をふまえて、次はどのように学びたいですか、どのようなことを学びたいですか。
飛鳥時代の時代の変わり方についてを知りたい。

研究内容2 児童生徒の深い学びを促す教師の働きかけ

(1) 教科の特質を生かした発問

▲本時では大和朝廷の強大さの根拠を問う「大和朝廷の強さや大きさはどのくらいだったか。」という発問と、単元の課題に迫る「米づくりが広がったことによって、どんな変化が起こり、社会の様子はようになったといえるか。」という発問を設定したが、児童の思考を促すためには、よりイメージしやすい文言や数値などを用いて問う必要があった。また、問い返しや価値付けなど、児童とのやりとりを通して深い学びの実現を目指すことも考えられる。

(2) 思考を束ねる可視化の手立て

○本時では、視点ごとの調べ学習の結果を時系列に沿って整理し、黒板にまとめる形をとった。(資料⑥) こうすることで、他の視点と比較したり、単元全体の学びを俯瞰したりすることができた。資料については、当時の大和朝廷の支配地域を示した地図などを用いることで「大きさ」のイメージをもたせることもできたと考えられる。

▲本実践の板書では、児童がまとめたオクリンクプラスをもとに教師がまとめる形をとったが、児童とのやりとりを通して作り上げることで、より知識の共有や定着を図ることができたと考えられる。また、「大和朝廷という大きな国へと変化した。」ということに児童が気付けるようにするためには、交流を通してそれぞれの視点について十分に理解を深めておく必要があった。

資料⑥

【単元を終えて】

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
A	第4時オクリンクプラス (12) 単元テスト到達度 90%以上 (25)	本時ワークシートワークシート (8) 単元テスト到達度 90%以上 (10)	第7時ワークシート (14)
B	第4時オクリンクプラス (22) 単元テスト到達度 60%以上 (13)	本時ワークシート (25) 単元テスト到達度 60%以上 (16)	第7時ワークシート (21)
C	第4時オクリンクプラス (5) 単元テスト到達度 60%未満その他 (1)	本時ワークシート (6) 単元テスト到達度 60%未満他 (13)	第7時ワークシート (4)

本単元を通しての評価は上記の通りである。知識・技能については、第4時時点では知識・技能の習得が不十分であった児童も、第6時までの学習成果を第7時で整理したことで、学習の定着を図ることができた。

思考・判断・表現については、本時の結果では、33名中8名のみ「おおむね満足できる」状態であった。多くの児童(25名)が、古墳の広がりや争いがあったことなどの米作りによる変化については気付いていたものの、大和朝廷の統一に結びつけることができなかったことから、交流や板書、発問を通しての思考の深まりが不十分だったことが考えられる。

主体的に取り組む態度については、事前アンケートで歴史学習が楽しみではないと答えた児童の割合が28.6%から8.6%に減少するなど、本単元を通して学習意欲の向上が見られた。